
赤いポスト

結城菜緒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤いポスト

【Nコード】

N1987B

【作者名】

結城菜緒

【あらすじ】

彼女は毎日待っていた。朝早くから、朝早くまで。今日も彼女は、白い息を吐きながら、足早に坂道をのぼりきる。（更新の変更についてはブログで発表（？）していきます。作者ページ辺りから飛べます）

1話 はじまる

秋もだいぶ深まった今日この頃（というより冬ですか？）。お布団から出るのが、とてもつらくなってきた。時には自分を甘やかして、あと少しだけ……とか言いながら、結局、学校なり仕事なりに遅れてしまうでしょ？

暖かく包んでくれるものから飛び出るのって、本当に勇気ががいる。勢いで出るにしたって、期を逃してしまったらそれまでだし。

それに、出たらもう戻れないもの。失敗をしても、自分にしか言い訳ができないし。

本当に、勇気がいる。

* * *

11月の終わりにもなると、はく息に白い色がつく。それを煩わしく思うのか、それとも清々しいと思うのか。

今日も彼女は、白い息をはきながら、足早に坂道を登りきる。

毎日彼女は、大多数の同年代の女の子が、ベッドだか敷布団だか知らないけれど、その上でもぞもぞと自分に甘えて、対の眠りにつく頃には、アイロンの匂いのする制服に袖を通していた。灰色の生地に真っ赤なリボン。

それから、慣れた手つきで白いエプロンをつける。湯気のあがるフライパンに掌をかざし、少量の油をたらす。決まって生卵をそこに二つ落として、それを菜箸でくずし、リズムよくかき混ぜる。

端から少しずつ。形になるんだ。じわじわと。こい色がつく。

オーブンで食パンをこんがり焼く。食パンの真ん中あたりに三本の焦げあと。

じわじわと。とばし邪道に、真ん中から。たまにはそれもいい。

その匂いたちにつられたのか、階段からぞろぞろと降りてくる、寝ぼけ顔の家族に、笑顔で応える。

でも、時間を無駄にできない彼女は、時計の針を見るなり大慌て。まだ少し柔らかい卵をこんがりした食パンの上のにせて、それを二つに折った。

今日の彼女は、大多数の同じ学校の女の子が、目をこすりながら誰に言うのでもなく「なんじー？」とか呟いている頃には、（はみ出ているけれど）食パンを頬張りながら、玄関で靴を履こうとしていた。

マーマレードを塗りたくった食パンをかじりながら手を振る家族三人に、彼女は手を振り返した。

玄関のドアをしめ、赤い郵便受けを少しあげ、中をちらりと除く。彼女は軽く眉をあげ、鞆を肩に掛けなおし、歩きだした。

今の彼女は、大多数の同じクラスの女の子たちが、鏡の前でヘアアイロンを片手に「あーん、髪がきまらなーい」とか言いながら四苦八苦しているときには、その長い髪を風になびかせている。

歩きながらリボンを整えると、指先の凍えに気づくことができる。

彼女は、はぁーと息を吹きかけたかと思うと、肩をあげ、身震いをした。

白い息が生まれる。

坂をのぼりきると、少し遠くに設立されたばかりの学校が見えた。彼女の通う高校だ。

坂の一番高い所から見える、新しくなったその風景に、彼女はま

だ慣れられずにいた。

彼女は、緩やかな下り坂を下りながら、すべり落ちてきていた鞆を、再度右肩に掛けなおした。

下り坂が終わり、平坦な道を歩く。少し歩いたところで、足をとめた。軽めの深呼吸をして、携帯を開いて時間を確認した。

緑色のフェンスが、彼女のいる歩道と校庭を隔てていた。とても広い校庭で、いつも夕方まで野球部やサッカーの大きな声が聞こえている。今の時間はまだ一年生も来ていなかった。

部活に入っている生徒がたくさんいる中で、彼女は帰宅部だった。彼女はフェンスに背を向けて、車道の向こう側を見ていた。

車道には、まだ車がほとんど通っておらず、とても静かな朝だ。

主のいない車道を、我もの顔で清まして歩く黒猫。足音さえ聴こえてきそうだ。黒猫は車道の向こう側から彼女のいる歩道に渡り、位置確保をして、そこに腰を沈めた。不定期なリズムで肉球を舐めながら耳をかいている。

彼女は微笑みながら、この空間を楽しむように、目をつぶった。

平坦な道路の、向こう遠くから、その音が辺りに響く。黒猫はいつの間にかどこかへ逃げていった。驚いたのだろうか。

ブレーキをかける音と一緒にいつも通りのバイクが、彼女の前に停まった。男の人がヘルメットをとって彼女と視線がぶつかる。彼女の目が困惑を告げるように、黒目がせわしく動きまわる。彼女は男に駆け寄り、「あの、もしかして……」と呟いた。彼女の目が輝いている。

彼女のその言葉を聞くと、男は慌てて、手を横に振った。

「あの、すいません。……川田さんは今日風邪で……代わりに僕が」男は申しわけなさそうに続けた。「あの、すいません。……あなたがササキ アカリさんですか？」

彼女の表情が一瞬曇った。

「はい。私が佐々木 灯です」

どこかから、雨戸を乱暴にあける音が聴こえたた。
今日がはじまる。

1話 はじまる（後書き）

はじめての連載です。

しかも、苦手な恋愛ものです……困りましたね（?）。しかも、郵便屋さんにしか出会ってもいませんし……。

そこまで長くはならないと思います。

初の企画小説に参加でウキウキしていたのですが、できなかったの
で、かなりへこんでいます……。序盤ですが、感想、批評、指摘、
アドバイスなどなんでもいいのでもらえたらなと思います。
次回も読んでもらえると嬉しいです。

2話 翌朝

佐々木灯は、どこにでもいるような女の子だった。それ故に、どこにもいないような女の子だった。

もし、どこか一つ特徴をあげるとしたら、朝早くから行動しだす所だろうか。でも、誰も彼女の行動の意図を知る者はいなかった。まあ、誰が何をしているかなんてどうでもいいことで。そんなことよりも、どうしたら自分が楽に幸せに生きられるかを考えた方が得策なわけで。

もはや当たり前の、そんな考え方を無視して、彼女に近づこうとする一人の男がいた。

厄介ごととは簡単に訪れるから、長々と説明はしない。それに、男が女に近づく理由なんて数えるほどしかないよね。

それで、何を言いたいかと言うと、彼女にとってその男の存在は厄介ごと以外の何でもないわけ。踏み込まれたくない一線は誰にもある。そこを越えられたら、温厚な彼女も不快感を感じる。

最初は、ね。

* * *

彼女は今日も、家族の誰より早く目を覚ましていた。

「マフラーしてきてよかったあ。うーっ 寒い」

首にぐるぐると巻いたマフラー越しに握りこぶしを口にあてる。手袋をしていない彼女の手は、例のごとくかじかんでいた。

冷たい空気、空間とフェンスは、なにも言わずにただそこにある。

寒さを少しでもまぎらわそうとその場でぴよんぴよんと飛びはねだした。

体温が上がり、肌と服の間の空気に温かい色がつく。

彼女が、右を向くと、そちらからまたあのバイクが来た。バイクに乗った男は、彼女の方に顔を向けると、ヘルメット頭をぺこつと下げた。

それを見届けて、彼女は歩き出す。

彼女の一日はそうはじまって、そう終わる。

彼女が毎日立っている場所から学校までを、平坦で静かな道が繋いでいる。それがこの道をこの方向で歩く時の唯一の救いだった。

暖かな風がふわりと頬をかすめるときも。

熱気の日射しを全身に集めるときも。

今みたいに自らの体温を愛しく思うときも。

冷たい風が体をつき抜けていくときも。

毎日彼女は、この道を歩いてきた。そしてこれからも歩いていく変化があるとかないとか関係なしに。

一台の黒い車が彼女とすれちがう。
とても静かに。

「いたっ！ なに…」

不意に彼女は背中に衝撃を受けた。そこに左手を当てながら、足下を見ると、黒い鞆が落ちていた。

「鞆……」

彼女はいぶかしげに首を傾げ、しゃがみながら、鞆を手を取った。
「悪い、それ俺の」

目線を落として鞆を見ていた彼女が上を向くと、数歩後ろに男が一人立っていた。彼女と同じ学校の制服だ。黒のスタンダードな制

服は、女子のそれとは違い、手のこんだ箇所など皆無だ。制服も黒いうえに、髪も黒い。真っ暗だ。真っ黒だ。

「手が滑った」

彼女の背中に伝ったた衝撃と比例するほどの手の滑り方ってどんなだろう。無器用って可哀想。

「あ……」

戸惑いつつも、彼女は弾けたように立ち上がり、鞆を男に手渡した。

男は軽く頭を下げながら

「どうも」

と呟いた。

「あのさ……」

頭を上げたかと思うと、今までの調子とは違う長文を吐き出した。

「アンタって、毎日あそこに立ってるだろ？ 朝早く。何してんだ？ ……あ、これは別に、俺がアンタのこと見てるとかそういうんじゃないでな。たまたま、今日早く目が覚めたから、気まぐれに早めに学校行くのも悪くないかなと思って。それで、アンタがたまたまそこに立ってたから、こんなに朝早くにどうしたんだ、と思って……思ったから」

一見して無口だと思っていた男が栓が抜けたように話し出したことに驚き、彼女はただただ目を丸くして男を見ていた。

すると突如、男は顔を真っ赤にして、それを隠そうとするかのように、左腕の脇辺りを近づけるよう、顔をくつつけた。そして、さりげなく横を向いた。

「何……見てんだよ」

まだ顔を真っ赤にしたままの男は横目に彼女をにらむように視線を定めた。

腕は、顔を隠しきれず、声は、心を隠しきれず。

彼女は、男の言動の意味が分からず、まばたきを何回もしながら男を見ていた。

「あの、顔真っ赤だよ。熱でもあるんじゃないよ……。最近寒くなってきたから、気をつけないとだめだよ」

男は腕を中段あたりに戻しながら、呆れたように彼女に投げかけた。

「は？ アンタ何言ってる――」

ふわりと、男の頬に温かさが触れる。

彼女は背伸びして自分のマフラーを男の首に巻きつけた。

「よかった、今日は水色のマフラーで。いつもは黄色か桃色なの。

……桃色じゃなくてよかった」

一、二度クスツと笑いながら、男の首元を見て、満足そうに微笑んだ。

足早にその場を後にする彼女を、またまた顔を赤らめた男は立ち尽くし、見ていた。

勇気をだしてのはじめての接触は、目的を果たせぬまま、時間ではなく彼女に、終わりを告げられるまでもなく去られてしまった。

後に残ったのは、彼女の後ろ姿と、温かい水色のマフラー。

黒色の男。水色をワンポイントに。

さあ、何がはじまる？

2話 翌朝（後書き）

読んでいただけて嬉しいです。ありがとうございます。

ちよつとずつ更新していきたいと思います。

ふー 連載って難しいですね（´ー、）

二回目でこんな感じですが、最後まで書き続けるので、次回も読んでもらえるといいです！（?）

まだまだ序盤ですが、感想、評価、アドバイス、気づいたことなどあれば、書き込んでもらえると嬉しいです。

お付き合いいただき、ありがとうございました。

3話 ある日

佐々木灯は、どこにでもいるような女の子だった。それ故に、どこにもいないような女の子だった。

普通の女の子。この頃は、それが減ってきたのかもしれないね。普通が変わることは、時代の流れ。常識が変わるのは、正常で異常。そして非常識。当たり前前の移り代わり。

そんな世の中だから、今日はそれでも、明日は分からない。人の気持ちなら、なおさら。気持ちは変わる。

* * *

今日の彼女は、制服の次に、赤いコートに袖を通していた。マフラーはクリーム色だ。

「よ、よよ、よう」
あくまでさりげなく、ガチガチになりながら声をかける男がいた。寒さのせいでもあった。コートとマフラーの彼女、黒の制服だけの男。

「あ、あなたはこの間の」
余談ながら、男ははじめての接触を試みたあの日、学校を休んだ。なんでも、三十八度の熱を出したらしい。
「あ、ああ。こ、これ」

男は水色のマフラーを差し出した。顔を赤くし、差し出す手はかすかに震えている。顔は横を向き、目は遠くを見ている。耳も真っ赤だ。

「あ……いつでも——」

彼女は途中で言葉を切った。はつとして、男の赤に染まった頬や、震える手を見た。

そして、マフラーを力いっぱい握る男の掌に自分の手を添える。「持っていてください。今日からまた寒くなるらしいですよ。それに……あ、赤色と水色とでは合わないから」

男の手から右手を離し、自分のコートを触りながら言った。

男は納得したのか、手に触れられてそれどころじゃないのか、マフラーを首にぐるぐる巻いた。それはもうぐるぐるに。

落ちつく為にか、男は自らの白い息を見ていた。

多少冷静になった男は、彼女の言動の意味を考えていた。寒くはないだろう、と不思議に思っているのだろう。家から出た時は寒かったし、少し前も寒かった。今は男からしてみれば、むしろ暑い。いつからか、気がついたら体かカッカしていた。わかりにくいのが、男は少し首を傾げた。

そうこうしているうちに、見慣れたバイクが二人の立つ場所を通り過ぎていった。

バイクの音の消えていく方向の、どこか遠くを見るつめる彼女。

その表情を、後ろに立っている男は、見てとることができなかった。不意に彼女は男に笑顔を向ける。

「それじゃあ、私、行きますね」

いつもどうり彼女は歩きだす。リズムが大切。彼女の体にそれは嫌というほど染みついている。喜ぶべきことだ。ちなみに彼女、ダンスは苦手。男は、彼女と郵便屋さんの関係が怪しいとにらんでいた。

男は、テクテクと一定のリズムで刻む彼女の後ろ姿を見据える。生ツバで喉を鳴らし、瞬きを数回した。自由な左手を力強く握りし

め、深く呼吸をする。多少震える声で、呼びとめた。

「な、なあ、アンタってなんでいつもここに来るんだ？」

背後からの思わぬ大声が耳に入ったのか、彼女は足をとめ、数秒動きがとまったかと思うと、自然に振り向いた。

振り向いた彼女はやわらかく微笑んでいる。雲と雲の間から差す光が、ちょうど彼女に降り注ぐ。

男の目には、全身に光を集めているかのように輝いて見えていた。「歩きながらで……いいですか？」

唯一の救いは、平坦で静かな道、だったのに。

3話 ある日（後書き）

短いすね（笑）

二ページ目にいかないなんて……

一度に長い文を読みたい方にはすみません。

ちょこちょこ更新していくので、次やその次も読んでもらえると嬉しいですよ（o^o^o）

できれば、一日一話ずつにわけて読んでもらいたいです。勝手な希望です。

評価、感想、批評、アドバイス、気づいたことなどあれば、書き込んでもらいたいです。

では、読んでいただきありがとうございました。

4話 ある日の会話

黙る背中を見てもわからない。笑顔を見つめてもわからない。言葉聞いてもわからない。

君の。あなたの。本心がわからない。

そう、誰もが。

いつだって隠している。

＊ ＊ ＊

彼女がいつも立っている場所から学校までは二百メートルあるかどうかだった。今日は普段よりも車の通りが多く、少し活気づいた車道を横目に、彼女と男は前後にわかれて歩いている。

歩きながら、と言う言葉を鵜呑みにして、男は彼女の後ろ姿を見ていた。男からしてみれば、後ろ姿は、最も見慣れた彼女の姿だ。

少し茶色がかった髪が腰の上辺りまでのびて、歩を進める度に揺れている。

一つ、男は違和感を感じていた。同じ後ろ姿であるはずなのに、何かが違う。今日の彼女は、男にとってのはじめての光景である赤いコートを着ていた。でもその大きな違いに、男は違和感を感じる。ことまでしかできていなかった。髪を何センチ切ったかどうかを気づけとまでは言わないけれど、コート——しかも赤いコートを着はじめたことに気づかないなんて……。

男の首元でかすかに憂いの雰囲気をつくっている水色のマフラーが、妙にさみしい。

すずめだかツバメだかわからないけれど、鳥がいくら鳴いても彼女は黙ったまま歩き続けている。それでも男は何も言わずに彼女を見ていた。飽きることもないし、逸らすこともしないで。

「あっ……」

突然彼女が声をあげ、男の方に振り向いた。髪が風の流れに乗ってささやいた。

「ごめんなさい。歩きながら話すとか言っておきながら……悪い癖です」

ささやかに表情をつくりながらも、普段の彼女よりもうつ向き気味に謝る。彼女より頭一つ以上背の高い男には、今の彼女がどんな顔をしているのか知ることができなかった。声色で心情を察知できるほど、きっと男は全てに敏感ではない。それこそ――

「で、なんでいつもあそこにいるんだ？」

――それこそ、この男は鈍感な方だから、読み取ることなんてできるはずもなく。こんなふうに言葉を投げられる。彼女が受け取り、当たり前のように返せるのだと信じて疑わない。

男の言葉を聞いて、下を向いていた彼女は、上目使いに男のマフラーに隠れた喉仏あたりに目をやり、数回瞬きをした。その間も男は彼女の見えない表情を見ようとししないで、一心に彼女を見つめ、その言葉に耳を傾けている。

彼女は何度か軽く頷きながら、目を力強く見開き、深めの呼吸をした。

「大切な人からの……手紙を待ってるの」

右肩に鞆を掛けている彼女の、自由でいて居心地の悪そうな左手が、赤いコートの裾に隠れている。

「大切な……それ男かつ!？」

男は数歩先にいる彼女に歩みより、掴みかかるような勢いで大声を発した。

「ええ? あ、たぶん……」

「たぶん!? たぶんでなんだよ」

男はすつとんきような声をあげた。それを取り繕う様子もなく、彼女に答えを求める。電線にとまったすずめかツバメが二人を見ていた。

「いや、あの……あまりにもあなたの勢いがすごくて……」

彼女は目を大きく開き、黒目は男に注目している。口ごもりながらもなんとか言い終わると、体を半分に折り、頭を下げた。

「それじゃあ、私、もう行きます。……それじゃあ」

男と必要以上に目を合わせることなく、逃げるようにそそくさと道を進んでいき、右に曲がり校門に吸い込まれていった。

男は、また後ろ姿を見ていることしかできなかった。愕然としていて、鞆を地面に落としてこそいないが、後ろから背中に衝撃を受けたなら、はらっと前かがみに倒れてしまいそうだ。

そう、後ろからの衝撃は、本当に危ない。でも、後ろばかり気にしてもいられない。だから、弱い。だから、疲労がたまる。だから、ちょっとしたことで過去を思いだしてしまう。

後ろも見ないといけないから、人間はいつまでたっても過去を忘れられない。……忘れたくないから、後ろを見る。

「男……」

そう呟きながら、男はマフラーに左手をかけた。目をつぶりながらマフラーの内側に口元を寄せると、そこに彼女はいなく、自分を感ずることできなかった。

きっと、今日も男は風邪をひく。

4話 ある日の会話（後書き）

寝起きに誤字脱字チェックなんて、初の試みをして更新しました。

お腹がすいた……お母さんはまだ寝ているので、ひとりさみしく買い置き菓子パンを食べることにします。

眠気と寒さにぶるぶる震えながらの後書きですので、いつも以上に意味がわからない文章かもしれません……

心も、不安すぎて震えているので、感想、批評、アドバイスなど、気づいたことありましたら、教えてくださると嬉しいです。

5話 次の日

風はいじわる。

風は気まぐれ？

ふわりと浮かべば風に乗れるけど、手紙は飛ぶことができない。
だから、届かない。

＊ ＊ ＊

今日も彼女は、母親よりも早くに台所に立っていた。コンロの上で、火にかけられたフライパンから湯気が上がっている。

ゆらゆら、ふらふら。

じりじり、クラクラ。

「……あっ！」

焦げくさい臭いと音で、我に返った様子の彼女は、急いでコンロの火をとめた。

彼女はため息をつきながら、左手で頭をこづいた。フライパンを、流しの溜った水に浸けると、深く、固まって溶ける音がした。

それは、きつと水の泣く声。熱い。押しつけるようなことしないで。

彼女は坂道を、前に前に進む自分の黒いつま先を見ながら歩いていた。

冷たい風が彼女をあざ笑う。懸命に歩く体に体当たりをする。
痛みを感じるのは、彼女だけなのだろうか。双方が痛くて、はじ

めて成り立つものが、本物ではないのだろうか。実体のない、実体を見せないものが、彼女を傷つけても、それは正当として彼女の中で評価される。自分が悪いのだと思えば、全てが過去になる。

長い髪が顔にかかっても、耳にかけることもしないで、自然と動く足を見ていた。

歩きながら震えることには慣れていた。

でも、震えながら歩くことに慣れていなかった。

下り坂が終わると、いつもの場所が彼女の瞳に映る。

そこには、郵便屋さんのバイクを車道の脇に停め、ヘルメットを片手に、立っている男の人がいた。

その光景を確かめるようにして、彼女は目をしばたかせた。

心の震えと一緒に、彼女の表情が固まった。まぶたも動かない。さっきまで勝手に動いていた足さえも、ただ棒としてそこに立っているだけだ。

動きをとめた彼女の体は自然と冷えはじめる。それでも、どんどん熱くなる気持ちの方が一方にはあった。でも、望む形ではないことも、彼女は知っている。

「あ、やあ。おはよう、灯ちゃん」

彼女に気づいた男の人は、白い歯を見せて穏やかに笑った。肌があさ黒いから、よけい目立ってしまう。

もう中年をとうに過ぎたというのに、男の人には子犬の面影があるように人なつっこい印象を与える。

「川田さん！」

彼女が男の人にかける。

「この前は悪かったね。カゼにかかってしまってたね。新米の細井に代わりを頼んだんだが」

「はい。お話はちゃんと聞きました。大変でしたね。この頃も寒いです」

彼女は微笑みながら、マフラーと同じクリーム色の手袋をした両手をぐーぱー、ぐーぱーして見せた。

「本当に寒くなった。でも温かそうな格好してるよ。赤いコートも似合っているし。本当は、もっと早くに喋りたかったんだけどな。時間に余裕なくてね」

「いえ！ いつも無理言って頼んでいるんですから。細かいことは気にしないでください」

笑ってそう言う彼女を見て、川田さんは途端に黙ってしまい、遠くを見つめた。

まだ少し緑の残っているこの町は、空気だけは澄んでいた。朝ならなおさらだ。

「もう、何年になるのかな？」

消え入りそうな声でそう言う川田さんの顔は、ふざけたりせずにまっすぐ彼女の方に向けられている。

彼女はきょんとしていたが、しばらくして言葉の意味を理解したようだ。

「八年……くらいですね」

「……ながいなあ」

「……そうですね」

彼女は、ふふふ、と苦笑いをしながら答える。

川田さんは鼻をこすった。

「はじめて灯ちゃんに会ったときは、こーんなちっちゃくてなあ」

川田さんは右手の甲を上にして、自分の腰の辺りを上下させて見せた。

「そんなに小さくなかったはずですよ」

「いやあ、ちっちゃかったよ。赤いランドセルを背中に乗つけてね。どっちが主体なのかも分からなかったくらいさ」

「おおげさですよ」

川田さんは、また遠くを眺めながら話しはじめた。遠くに見える山も、どこかへと続いているんだ。

「あれは……そうだな。最初は、君の家の前だった。小さな体にランドセルを背負った女の子が立っていたんだ」

彼女は黙ったまま風にふかれている。

「あの頃は俺も若かったかな、今からすれば。俺が、何してるの？
って聞いたら、手紙！って言うんだもんな。わけが分からなかったよ」

川田さんは、時折笑いながら彼女の方に顔を向けつつも、目をあ
わすことはしなかった。

「そうか。あれから八年もたつのか。そりゃあ、灯ちゃんが大きく
なるはずだ。もう、父親の心境だよ……」

眉毛の両端を下げて、反対車線を通る車を見ていた川田さんの言
葉が途切れる。

彼女は川田さんの顔をよく見ようと、顔を傾けて、覗きこもうと
した。

「……まだ、待つのかい？」

川田さんは、彼女の目を見た。

どこからか、木の葉っぱがザワザワと風に踊らされる音がする。

「もうそろそろ、忘れた方がいいんじゃないかな？ 朝早く起きる
こともやめて、普通に生活したらいい。本当は部活にだって入った
いんだろう？ ……いや、部活については勘なんだけどね」

川田さんはうつ向いて、白いヘルメットを両手に持ち代えて無器
用に転がしている。何かの拍子に、簡単に地面に落ちてしまいうそ
うだ。

「ほら、そんな男に縛られるなんてもったいないだろう。灯ちゃん
なら、すぐにいい人ができるよ。あ、ほら、そうだ。細井なんてど
う？ 仕事も真面目にするし、約束ごと破ったりなんか――」

風がやんだ。

風はいじわる。

風は気まぐれ？

それでも彼女は微笑んでみせた。

「ごめんね。傷つけるつもりはなかったんだよ。細井が灯ちゃんの
ことをしつこいくらいに聞いてくるんだ。だから、つい灯ちゃんの

幸せそうな顔が見たくなってね」

川田さんは、彼女に出会って間もない時期に、奥さんと娘さんを火事で失ってしまった。それは、彼女も聞いた話だ。

さみしそうな横顔が、自分のせいだとわかっていながらも、彼女は川田さんの提案を受け入れることができない。

「気づかいは、とても嬉しいです。でも、ごめんなさい」

そう言うってから、頭を下げた。

その姿を川田さんは見ている。

「……そんなにいい男なのかい？ そいつは」

川田さんは、諦めたように、やれやれとまばたきをして、息をはいてから言った。

彼女は少し目を伏せた。

やんだ風でも探しているのだろうか。

「うーん。どうでしょう？」

川田さんの両手にしっかりと持たれたヘルメットを見ながら、呟く。

いつものような微笑みを見せずに、彼女はそこにいる。

「優しい人です。とても。でも、ひどい人です」

川田さんは、彼女の言葉の意図を読みとろうとしてか、口を少し開けながら黙って聞いていた。

「でも、本当に悪いのは私です。待つことしかできない私がいけないんですよ」

彼女は、右肩に掛けた鞆を掛けなおし、両手を合わせた。

「本当によかったと思っっているんです。もし、場所を聞いていたら、住所を知ってしまったらどうしよう、どうしただろうって考えたことがあります」

合わせた手の、片方である左手で頭を抱えて、髪の毛をねかせた。

「……それが怖いのは、臆病者の証拠です」

また、風がふきつける。

5話 次の日（後書き）

川田さんがピックアップされた回ですね。ドキドキです。落胆など
されていないといいのですが……。

弱い体が、また弱りつつあるので、更新が遅れだすかもしれません
……いつも大体この二時とか辺りの時間帯に更新するつもりと流れ
なので、覗いてもらえたら嬉しいです。

うー まだ序盤の中盤（？ 終盤？）ですが、感想、評価など待っ
ています。

ではゞ（＾、＾）

6話 この日

積み上げてきたものは、揺るがない。そう思っている。でも、人が違えば状況が変わる。状況が変われば、結果も違う。

人が変われば結果は変わる。

じゃあ、どうだろう？

＊ ＊ ＊

今日、彼女の目覚まし時計はいつもの時間に動きだした。彼女はすぐにベルをとめる。

ベッドと側の窓を覆う朱色と白いチェックのカーテンが揺れた。

普段は、ある程度すみやかに起きて着替をはじめる彼女だが、今日は少し勝手が違うようだ。

目覚まし時計をとめた彼女の右手は、一行に動きだす気配のないまま、布団の中に戻ることもしないで投げ出されている。中途半端に横たわる細い手首に、か細く鳴く鳥の声が触れる。

柔らかく、暖かい。でも、硬く、冷たい。

日の光りが昇りきらないこの時間帯。眩しさをさえぎる為のカーテンは、生まれたときから望む役にたてていなかった。

朝日を透かして、目覚めの良い時間を。この部屋を暖かな空気ですっぽいにしたい。そんな望み。

でも彼女の為にカーテンができるのは、冷たい外の世界からの刺激をやんわりと軽減させることだけ。

いつ頃からだろうか？

カーテンの世代交代よりも少し前のこと。

彼女は部屋の窓を、雨戸でしめきることはしなかった。この寒い冬の時期だって、ただの一度も。

しめきりはしないけれど、――むしろ暖かさを望んでいるけれど――薄い布地で隠し隔てる。

そうやって彼女は、長く冷たい冬を乗り越え、すごしてきた。

程なくして起き出した彼女は、寝ぼけた様子をまるで見せずに、鏡の前でスツスと髪にクシを通した。

枠の中の自分と目を合わせた彼女は、目の下に人さし指を添え、ひっぱっている。数回瞬きをした後、もう一度彼女は自身と目線を交した。

彼女は朝ごはんも早々にすませ、テーブルにきちんとついてふわふわのロールパンにかじりつく家族に声をかける。淡いストライプのお揃いパジャマを着た父親も母親も、まだ寝ぼけまなこ。弟だけがぱっちりおめめで、牛乳のたっぷり入った透明コップに口をおしつけている。

今日はいつもより空気が暖かく、日の昇り具合もなかなかだ。

それでも彼女は白い息を吐いて道を急ぐ。赤いコートを見つめる黒い猫。電線にとまり彼女を見るすずめ。朝ごはんの、やわらかなお味噌汁の匂いが漂う。

その風景の雰囲気溶け込んだ彼女は、ふと立ち止まり、掌を添え併せ息を吹きかけた。白い息はなぜか冷たく見えるけれど、とても温かいものだ。本人しか知りえないから、猫にもすずめにも定かではないけれど。

一台の郵便屋さんが歩道の近くを通りすぎるのを見て、彼女は歩

みを早めた。

坂道を上りきると、彼女は驚いて目をしばたかせた。

いつもの場所に、川田さんがいる。例のごとく郵便屋さんのバイクを横に停めて、立ち尽くしている。その光景を見て、彼女は駆けだした。

昨日は『風邪で休んだ』ということ伝えるため――理由があった。じゃあ、今日川田さんがどうしてあそこにいるのか。彼女を待っているのなら、それはどんな理由からなのか。正確なことは彼女には分からない。

でも、何かあるのは確かだ。それを感じとったからこそ、今彼女は走っているのかもしれない。

考える為の空気を白い息に変えて、次々と吐きだしながらも、彼女の頭の中では言葉がぐるぐると回っているのだろう。

ゆるやかな下り坂を駆け下りる。そんな行為が、なおさら彼女に息を吐かせた。彼女の体温が上がり、頬は温かさで覆われ、頭を働かせなくする。

必死な彼女の存在に気づいた川田さんが、手を振りだす。それは、彼女が川田さんの元にたどり着く、数秒前のことだった。

言葉にならない想いが彼女の肺の中を回り、いつまでたっても出てこない。息を吐く反動で、せわしく浮き沈みする華奢な肩がどこか悲しい。

上半身を傾けて、ずり落ちる鞆をなんとか肩に掛けなおすも、すぐにだらんと垂れてしまう。

川田さんはそんな彼女に一言、遅かったね、と声をかけた。寝坊でもしたの、と二言目。

彼女はようやく顔を上げ、朝の光に照らされながら笑う川田さんを見た。

川田さんの言葉。おでこに微かにはりつく前髪、服の中で背中を

流れる汗。そのどれもを感じて、急速に彼女の心は温度を下げていった。

何も応えない彼女を尻目に、川田さんは慌てたようすでバイクにまたがる。彼女の動きを制す役目をした川田さんの左手は、すぐにハンドルへと吸いついた。彼女が目をとじると同時に、バイクは走りだし、背中だけを見せてやわらかな坂道を進んでいった。

バイクの音が遠くに消えた頃、後ろからの大きな音がして彼女は反射的にとび退いた。

辺りに轟音を残したトラックは、川田さんの消えたといった道を急いで、車体を左右にゴタゴタと揺らしている。

車道と歩道の境目にいた彼女への警告音が、痛く耳に残る。

彼女は歩道の端にあるフェンスへと、横に寄りかかるように立ち位置を変えた。彼女は、頼りない網目状のそれに頭をもたせかけ、大きく息を吐いて再度目をとじた。

昨日、彼女がベッドに入ってから、寝息が聴こえてくるまでには、普段よりも少し時間がかかった。今朝、目覚ましが鳴ってからの少しの間、静かな時間が流れたのもそのせいだ。

彼女は自分でそのことに気づいた。

目をとじて考えれば、いたって簡単に分かったことだろう。今日の、ベッドからここまでの道のりは、普段と違った雰囲気・時間背景だった。

風を通してやまないフェンスは、彼女の熱い体を冷やすにはもってこいだ。頭だけが急激に冷めている今の現状は、彼女の脳に嫌にはっきりと物事を考えさせる。

一段と冷えた風が彼女の体を通りすぎた。

彼女は首筋の凍えに気づき、目をとじたまま左手を沿わせるとそこにはマフラーがなかった。冬の寒い季節、彼女は好んで毎日マフラーをまいてすごしていた。外出時・登下校ならなおさらだ。

彼女は微かに笑った。白い息が口からこぼれる。

体はとうに冷えきっていた。彼女は向きなおり、背中をフェンス

に任せた。冷えた鼻先を両掌で覆うようにして、目頭から鼻の側面に左右の人さし指添えた。

吐きだされる白い息は、途端に見えなくなった。

目をとじていると、自分の中も外の世界も鮮明に感じられるようになる。それに、見たくないものは見えない。

彼女の耳に、次第に物音が膨らんでいく。最初は耳に入ることもなかった。だんだんとそこに何かが始まりだす予感。

彼女は目をあけた。

世界は、彼女の望む形になったのだろうか。

音の広がり、フェンス越しの校庭にあるものだった。野球部とサッカー部の部員が、部活はじめに準備をしている。

せつせと動きまわる人たち。

彼女は視界いっぱいにはじまりを感じたのか。

コートの袖下でかじかむ手が、力なく握られる。とても弱々しい。それでも、決意の形を作っている。

右から左へ。左から右へ。見える世界から力をもらうかのように、彼女の表情がみるみるうちに変わりはじめた。

彼女の瞳が、心なしか強く光る。丸い目に光。口元もきりりとしまる。ぐてつとしてどうにか腕にとどまっている鞆を肩に掛け、息を大きく吸い込み、ゆっくり静かに吐いた。

歩きだした彼女の長い髪がなびく。確かに彼女は歩道を踏みしめる。いつもの静かで平坦な道とは違うけれど、彼女にとっては同じ道だ。

彼女の動きが、なんのまえぶれもなくとまった。首を右に傾げて、髪がすると肩からすべる。今度は左に傾げた。

しばしその場に立ち尽くした彼女は、何を思ったのかさつき自身もたれかかっていたであろう辺りのフェンスの所まで戻り、金網

に軽く背中をあずけた。

目をあけたままの彼女は、何を思い、考えているのか。

部活のランニングの掛け声が、彼女にも響いた。背中に映る広がり
を彼女はめいっぱい受けて、身をゆだねている。

彼女はまた首を傾げた。

6話 この日(後書き)

本当にかなり遅くなりました(p。n。)

これからは4日か5日おきに更新できるようにがんばるので、続けて読んでくださると嬉しいです。間違っても未完で終わりませんよ！感想や文章の指摘など、もらえるものはもらいますので、できたらお願いします(〃〃〃)

えーっと、では、読んでいただき、ありがとうございました(＊、

▽、)ノ

では☆

7話 その日

風は不安を連れてくる。悲しみも連れてくる。

風はいつまでたっても、喜びを連れてきてはくれない。

＊ ＊ ＊

昨日の教訓を活かしてか、彼女は目覚ましのベルを止めると同時に掛け布団をはいで、ベッドから離れ、きびきびと髪をとかしだした。

案の定家の一階には誰も居らず、各々の部屋でいまだ深い夢の世間で寝息をたてているのだろう。

時間はまだ早いはずなのに、日の明るさがリビングにさしこんでいた。なんだか珍しい日だ。

そんなことを気にもとめずにキッチンに立った彼女は、素早く食パンをトースターに入れて、冷蔵庫からジャムとマーガリンを取り出した。

苺ジャムとマーガリン。彼女のお気に入りの組み合わせだ。

食パンを形よくさしこまれたトースターは、昨夜彼女の父親が知人にもらってきたものだ。彼女の好きな赤色をしていて、所々に黒が注されている。

トースターの初仕事が彼女の今朝のトーストということになる。

食卓テーブルの端に置かれたトースターの起動を、覗きこんで確かめる彼女。

髪の毛がサラサラすべる。それに気づいた彼女は、左の小さな耳

に髪をかけ、毛先辺りに触れて背中へと流した。マフラーを巻いてばかりいる彼女の白い首筋があらわになり、彼女の向こうにある流し上の擦りガラスからの光に照らされる。

輪郭がぼやけて、でも存在がはっきりする。

トースターの起動を確認した彼女は、食卓テーブル対の椅子に座り、背にもたれた。

昨日、彼女はいつもとよりベッドに早くはいり、眠りの時を待っていたのだろう。それでも思うように寝つけず、何度も寝返りをうっていた。かと思えば、左に顔を枕に倒し、目をとじることもしないで、大きな動きをしなくなった。時折、枕にうまる頭を動かして首を傾げていた。

チンッ、トスッ

高い機械音に驚いて、椅子に座る彼女の上半身がビクッと上下した。目をあげると、すぐにとびこんできたトースターの中から、食パン改めトースト二枚が勢いよく跳ねた。

彼女は慌てて立ち上がり、トースターからトーストを取り出した。まんべんなくこんがり焼きあがったパンをお皿にのせると、彼女は目をぎゅっとつぶり、まばたきを数回した。

温かい表面にバターがスツとなじみ、苺ジャムがかぶさると、あつというまにおいしそうな朝ごはんとなった。

きちんと椅子に座りながら、彼女は朝ごはんをおいしそうにいただいた。

トーストを食べるサクサクとした音と、冷蔵庫の作動音だけが、部屋いっぱいに広がっていた。

甘い甘いジャムの匂い。

あまり風が強くなく、やっぱり普段よりも日の暖かさが強い日だ。家を出て、はじめての風が彼女に触れる。

彼女はふふっと笑い、白いマフラーを緩めに首に巻きつけた。それが赤いコートによくはえる。

坂を上れば、そこには広がる世界。

長く一本の道路が続き、細かく分かれる小道や、隣同士くっつき、つながれた家々。

彼女の通う学校の校舎も校庭も一望できる。

いつもの場所につくと、彼女は携帯で時間を確認した。振動でストラップが揺れる。

彼女は片手でパタンと携帯をとじると、一瞬澄んだ青空を見上げた。青と言うよりも、水色くらいの薄いもの。

「あと、七分くらいかな……」

穏やかそうに柔らかく息と声が、彼女の口からこぼれる。

今日はなんだか、真冬の朝とは思えない。日差しや風も空気も。すべてが暖かさをおびている。そんなこともあるのだろうか。

はじまりは驚きを。いつしか安心を。そして、また変わるもの。与えてくれることの佳。

「おお、今日も早いなー」

フェンスに背を向けているための後ろからの低い声に、彼女が振り向く。

「大山先生！」

フェンス越しに立つ一人の男のが目を細くして笑う。

「今日は比較的あったかいけど、温かくしてないと体崩すぞ」

大山先生は腕を組むような形で、両腕を両掌でさする動作をしてみせた。“寒い”の動作をする大山先生が着ている紺色のジャージは、上着の前が全開で、中の白いTシャツが大幅に見えている。

「おはようございます」

ふふっと顔全体をほころばせながら笑う彼女。

「ああ、おはよう」

そう言う大山先生の向こうがわ、遠く。サッカーボールを出して

いる男子生徒が、彼女の目に入った。

「サッカー……」

彼女はほろっと小さくつぶやいた。

「ん？ ああ、あいつらか。朝早くから大変だな。まあ、俺が収集してんだけどな」

大山先生は、サッカー部の顧問。人柄の良さと、スポーツの得意さを合わせ持つ、生徒に好かれている体育教師だ。

「こんな朝早くからやるだけあってな、サッカーは楽しいぞー、佐々木」

彼女の方に真っ直ぐ向いて、大きな顔をフェンスに近づける大山先生。

「そうですか」

サラッと答える彼女に、大山先生は前のめりに倒れるような動きをした。

「まー、なんだ、その……」

大山先生は頭をかきながら、バツが悪そうにやや下を向き話した。

「そんな早くくるなら、うちのマネやってくれ」

言い終わると大山先生は、大きな顔の小さな目で彼女の顔を見ると、ふっきれたように変に息を吐き、下唇に舌沿わせた。すぐ後、おもむろにジャージのファスナーをあげて、体を震わせた。

「うちの部にも、お前さんを見てるやつがけっこういてな。ほら、フェンス越しに立つ美少女ってな感じらしいぞ」

頬を指でぽりぽりかきながら、足下の土を耕しだす大山先生。

彼女はぼけーっとして、大山先生を見ていた。顔と土まみれになっ

ていく靴を、ゆっくりと交互に見合わせている。

「サッカー部には丸見えだからな、お前さんの姿」
フェンスの枠組みの所を触りながら、大山先生は小さな声で言った。

「そんだけだったら、まあ、いいんだわ」

大山先生はフェンスに背中から寄りかかり、グラウンドに目を向けた。

「佐々木、フォワードって分かるか？」

「フォワード……。サッカーのポジションですよ。一番前にいる
ああ、と大山先生は白い息を吐いた。

「一年にな、お前さんと同じ年だな。ちょっと見込みあるやついるんだよ。そいつが、そのフォワードでな」

ほらあいつだ、と大山先生は遠くを指さした。ボールをもちながら、すごい速さで走っている。ドリブルというものだろう。

「プレーに性格がでてんだな。前のめりになるんだよ。だが、無器用なりに頑張る奴だ」

彼女からは大山先生の斜め後ろからの横顔しか見えていなかった。でも、暖かに無器用な優しい声は彼女の耳にも届いているはずだ。

彼女は黙ってマフラーに手をかけ、巻を少し強くした。

「まあ、将来のエース候補ってやつだ」

大山先生は空を見上げた。すずめが雲の間をぬうように飛び、消えていく。

雲さえ流れれば、ただの澄んだ水色になるのに。

「……なんだけどな」

サッカー部と野球部の部員が、だいぶ集まりだしたらしく、グラウンドは活気づいてきた。その中で、大山先生ははっきりと声をだして話し始めた。

「なのに最近朝練に遅れてくるわ、風邪ひいて休むわで困ってるんだ」

大山先生の腕組みをしていた力が弱まり、少しだらんと形が崩れた。

「大変ですね」

「……俺はな、けっこう朝早くから職員室にいるんだよ。んで、数日前、お前さんとうちのを見てな」

いつのまにか大山先生は顔を横に向けていて、彼女からはまった

く見えなくなっていた。

「はい？ 私と、うちの……？」

彼女の問いは、空気に吸い込まれてしまったようだ。野球部のラニングの掛け声が、グラウンドに強く響いている。

サッカー部員の集まりはまだまばらで、ボールを取り出して練習しているのは四、五人程度だ。

大山先生は、あれきり黙ったままだ。

話しが終わったのか、次の言葉を探し選んでいるのか。

彼女は何も分からず、なんとなくサッカー部の部室小屋を眺めていた。部室小屋の前のセメント床上あちこちに、既に練習している人たちの物であろう鞆や服が放られている。

彼女は毎朝、ほぼ同時にここに来ているので、この風景を何度も見たことがあるはずだ。野球部やサッカー部の存在も知っていた。いつも背中に受ける響いた声が、それを教えてくれた。

さっき大山先生が“エース候補”と指した生徒が、部室小屋に近づいていくのを彼女は見ていた。どうやら水分補給のようだ。

彼女の所からは、その生徒の物と思われる鞆で何かごそごそしている程度しか見えなかった。彼女には、屈んだその生徒の体が横から綺麗に見えていた。

水分補給が終わったらしいその生徒はタオルで顔をなぞり、それを頭にかぶせ、片手で鞆を持ち上げた。

水色の布が鞆から離れ、するとセメント床に落ちる。

するとその生徒は、頭にのせたタオルが落ちることも気にせず、慌てた様子で床に横たわる布を手にして汚れを払っている。

その光景を見た彼女の口から、声にならない言葉が放たれた。

「あ……あの……」

ほとんど吐く空気ではないその発言を耳にしたからなのか、大山先生が不意に言葉を発した。

「お前さんに、惚れてるんだろうよ」

彼女は大山先生の顔を見ようとしたが、やはり彼女の立ち位置か

らは見ることができない。

お互いに言葉を発することもなく、一人の男を見ていた。水色の布を大切に手に持ち、部室へ入っていく男。

大きな音をたてて通りすぎるバイク。その音は、彼女の背中に受けとってもらえることなく、寂しく澄み消えた。

7話 その日（後書き）

約束（？）よりまたまた遅くなりました（＜―＞）

特別な私事情もありまして……。

しかも予定よりも文字数が増えたのです。すべてあの大山先生のせいなんです。お喋り好きはニガテ……。

すみません。言いわけはやめます！

次は23・24・25日に…なんとか間に合うようにしたいです。感想や指摘など待ってます。では、読んでいただきありがとうございます（。√。）

8話 数日間（前書き）

1月22日にメッセージをくださった方、ありがとうございます。
匿名ということで、この場で伝えるしか方法が思いつきませんでした。とても嬉しかったです。

では、本文をお読みください♪

8話 数日間

これからも、きつと。

ずつと、そう。

時間は流れることを変えはしないのに、その中には変えられないものがあるから。

＊ ＊ ＊

昨日の暖かさなんて嘘のように、薄着の彼女を冷やす冷氣。

ガラス戸越しから見える、ほのかに白く霜の降りた景色にみとれた様子の彼女。柔らかく変わる目と口。彼女は微笑みながら、遠くどこかを見つめ、冷たい板ガラスに左手でそつと触れる。

体温のかよった彼女の素肌と、外気に冷やされた透明板が触れ合うと、そこにはたちまち白い跡が生まれる。放つてしまえばすぐに消えてしまう程度のもの。

体との距離が近くなればなるほど、温かい白に染まる冷たいもの。

白い縁側その下に、きちんと二つ綺麗に並ぶピンクの履物。

庭に出た彼女の足下は、見るからに寒そうなピンクのサンダルで、白い足首がより綺麗に見える。

芝生の感触を確かめるように、爪先をパタパタ上下に数回動かす。そんな彼女の口元は深くため息をこぼしていて、すぐに上唇に下のそれが覆われた。足の動きが止まると同時に彼女は目を伏せた。

霜の降りた芝生は、短いながらも確かにそこに伸びており、かぶさる重さにしなりをみせることなく生きている。もっと言えば、白く冷たいそれを利用して朝日を反射し、燦然とキラキラ輝いている。

遠くから、少しずつ大きくなる音。

彼女の家の囲いは緑の葉をつけた植物で、標準サイズの彼女が横に立つとちょうど胸辺りの高さだ。

聴き慣れた音が近づき、合わさる瞬間。緑の境壁の上を白いヘルメットがすべっていく。上下せずに前方——彼女から見た左——に迷いもなく進んで消えた、底辺が欠けて見える少し傷ついた白い球体。

彼女は肩をすぼめて震えだし、細く永い息を吐く。踵を返して家の中へと入り、ガラス戸をしめた。

縁側の下には少しだけ揃えられたサンダル。それと石の床との間から、何かが染みだす姿を残して、彼女は寒さを切り放した。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

昨日とは違い、暖かい空気。霜が降りていないことや、家族がすでに起きていること。

「タツくん」

縁側にちょこんと座る青い背中。振り向いて笑う、無邪気な表情。くつきりとえくぼがでている。

「おはよう。大丈夫？ 寒くない？」

「さむくないよ。あったかい」 牛乳のたっぷり入ったコップを両手で持ちながら、にっこりと明るさを彼女に返したタツくん。

その姿をみて彼女の暖かさも増したようで、口元が優しく緩んだ。彼女が隣に腰かけると、タツくんは行儀よく下げていた足をバタバタと動かした。

「牛乳美味しい？」

「うん！ お姉ちゃんはキレイなんだよね。おいしいのに」

タツくんは、コップに口をつけてチビチビ牛乳をすすっている。

「今日は動物園だね。何が見たい？」

頭一つ以上小さな高さにあるタツくんの顔を、のぞき込むように

適度に頭を傾ける彼女。

「んーとね。んーんと……キリンさん！」

タツくんはコップを両手で守るように膝に置いて、こぼさないようにか顔だけを彼女に向けた。

彼女は何も言わないで、ただ口をとじたまま口角を上げて微笑んだ。

またタツくんは、のばした足をバタバタさせている。靴下の柄はゾウさんだ。

「タツくんももう十歳になるだね。誕生日おめでとう」

「うん！」

家の中では二人の両親が動きまわって、それぞれの準備をしている。動物園と遊園地。のんびりやかな家族は、早くに出発しなければ、大切なお祝いの日を有意義にすごせないらしい。

タツくんの持つコップの中の牛乳が半分くらいになった頃。今日もまた、緑の壁の上を白のヘルメットが走っていった。

彼女はそれを見届けると、胸をなでおろした。目をつむり、息を吐く。白い色はついていない。

「さ、もう中に入る？ 風邪ひいちゃうよ」

立ち上がる彼女を見ても、何も言わずに牛乳に口をつけているタツくんに問いかけた。

タツくんは首を横に振った。牛乳を一口含む。

「ちっちゃなころ。まいにち、お姉ちゃん——灯ちゃんがいて、お兄ちゃんがいた。ボクのキオクがおかしいのかな」

彼女はガラス戸の取っ手に手をかけたまま、動きをとめてタツくんを見ている。

少しひらいた戸は、寂しく冷たい風を家の中へと招き入れている。風の流れはとまらず、日の光も絶えずそこにある。違いは、目には見えず、耳にも聴こえず。

彼女は眉間にシワを作りながらも微笑み、タツくんに向けた。

「ううん。タツくんの記憶違いなんかじゃないよ」

＊ ＊ ＊

昨日と一昨日、連休を通しての今日。彼女の当たり前の日々がぐるぐると回り、どこまでも続く。

朝早く起きることが全てではないし、フェンスを背に郵便やさんのバイクを待つことが彼女の仕事でもない。ただ――。

繰り返しそうしてきたことは、簡単には崩せない。
時間も行動も気持ちも。

時間は流れることを変えはしないのに、その中に変わらないものがあるから。

彼女はフェンスのあるこの空間に身を委ねる。首もとには白いマフラ―を忘れない。目をとじることもあけることもして、彼女はそこに立っている。

いつものように、グラウンドには背を向けて。

今日も彼女は、誰かからの手紙を待っている……。

8話 数日間（後書き）

期日はなんとか守れました（^v^；）　よかった…。

えっと、騒ぎなどありまして、不快に思われた方もいると思います。私は今まで通り書き続けますし、私自身はあそこまで騒がれることをした覚えは全くないです。（熱くはなっけてしまいました…）

傷ついてへこんで体調がいつも以上に悪かったので、弱気にもなりました。

読者さんがどう思っているのかとかとても不安でした…。一人でも待っていてくださる方がいたらそれだけで、くらいの気持ちで書きました。

ブログはじめました。評価欄に書き込んだり、メッセージを送ったりは気が引ける、といった読者さんがいるとしたら少しでも交流出来たらなと思ひまして。気軽に覗いてもらえたら嬉しいです。（作者ページあたりからとべます）

では、読んでいただきありがとうございました。

（次回更新は2月の1、2日を目標にします）

9話 くる日

多少のさじ加減が、不幸をまねく。だから、おちおち昼寝もできなかつたりするのにな。

そんな気も知らないで。

＊ ＊ ＊

今日は、とても澄んだ空で。どこまでも、高く続く青のようだ。まばらに広がるうすい雲は、測りを務めるかのように上へ上にと重なり、姿を映している。

カーテンの隙間から見える空は、とても狭くて。内側から見るだけだの印象だと、空はちっぽけなものでしかない。そんな形。

クシで髪をとかす彼女の動きは、少しの淀みもなく。

実物と鏡に映る彼女にも、少しの違いもなく、そこに。

今朝の彼女の朝食は、昨日の夕食の残りだった。

徐々に暖かくなるリビングと共に、温まる鳥のから揚げと白いご飯。くるくると電子レンジに回されながら熱をおびていく。

本意ではない体温。苦痛でもない上昇。

湯気の上がる、ご飯とから揚げ。それに、冷蔵庫から取り出された、小皿に盛られたサラダを足す。プチトマトとうすく切られたきゅうりが、朝食に彩りを与える。

うす茶色のランチマットが、今日のカラーだ。

玄関を出て、外気の温度に震えた彼女は、コートの上から両腕を交差させ、同一のそれらをさすった。白い手袋が上下して、見え隠れするはずの赤い生地。その存在は常に消え入ることなく、繰り返しの摩擦力を蓄えている。

そして、手袋と同じ色のマフラー。

指の別れていない手袋で、器用に郵便受けを覗き立ち直ると、彼女は一度大きく震えた。

そして歩きだす。

すれちがう風を気にもとめないで、今日も彼女は坂道をのぼりきる。

遠く彼方で飛ぶ飛行機を、包み込む空。

見上げることしかできない包み紙。想うことで存在する、水色の包装紙。

白い息が上へと進む。

「わぁ、空が高い」

揃えられた彼女の前髪が、微かな重さで左右に別れた。

グラウンドはまだ静かで、フェンス越しものどかな一時。

通りを行く車が影を作る。

そんな繰り返し返しの動きを、澄んだ瞳で追う彼女がいる。先ほど別れた彼女の前髪は、音もなく元通りになっていた。

風が吹く度に場所を変える、髪の毛先。数分も変わらず、一点を見つめる彼女。

ものの動きを追う、黒目が動く。いつしか彼女は、ぼやけた自らの視界に目を預けていただけのようだ。

いつの間にか、グラウンドがにわかに活気づき始めていた。土香りの流れにのって、並び重複する声。広がった空気が反響している。彼女のぼやけた視界は一瞬でどこかへと流され、黒目は二度左

右に迷いを見せた。

フェンスに寄り添うかのように立つ彼女の頬が、わずかに染まった。マフラーは、顔へ吹く今日の寒さを防いでほくれないのか。

「よ、よう」

また一瞬、彼女の黒目が迷いを見せた。声のした方を、彼女の視線が包む。

まだ明るくなりきらないこの時間帯。空の青も、水色といったところだろうか。

その空を背景に、そこに立つ男のするマフラーも同色だ。

「あ……」

彼女の口から小さくもれた呟きは、弱く吹く風に流された。マフラーの下で、彼女の喉が小さく動く。

「おはよう」

言葉の後に、切れた白い息が再度吐かれた。

「ああ」

男は短く答えると、おもむろに彼女の隣、どちらが手をのばしても届く距離に、立ち位置を移した。

「久しぶり」

男の低い声が、車道を行く車に合わさりながら彼女の耳に届いた。一人の時とは違う、彼女の瞬きの回数。口元をマフラーで隠すように、首をすぼめている。

「そうだね」

そっけなく声だけで答える彼女。落ち着きのない睫毛。

通りすぎる動きの雑音が二人を束ねて、空間を作っている。細やかな鳥の鳴き声など聞こえない、さながら雑な玄人。

放っておいたら、崩れ落ちてしまいそうなカラ時間。

「男の手紙、待ってる！　って……」

唐突に切りだした男の発言は、大きく空気を壊した。

車道とは空気が隔たれた。

彼女へと向けられた男の強い視線。彼女はと言うと、その視線を受け流すわけでもなく、反らすわけでもない。ただ男を映す黒目。マフラーから浮き飛び出て、あらわになった彼女の口元は小さくひらいている。

「な、なんだ…それかあ」

彼女の目は動かず、あいた口から声だけがもれた。

「なんだ、って？」

彼女の様子がおかしいとでも思ったのか、男は眉をひそめた。

「い、いえ！ えっと、手紙…？」

掌をマフラーの前でせわしなく動かす彼女。問いを思い出したからか、明るく声をあげた。

「ああ」

彼女から車道へと向き直る男。

「そいつとはどんな関係なんだよ。もしかしてつ、付き合ってるのか……」

段々と小さくなり、消え入った声。雑音は穏やかに、数えも少なくなっている。

彼女は体をななめにして、そんな男を見ている。

「そんなじゃないよ」

彼女は左手で、首辺りの後ろ髪触った。マフラーに抑えられ、心なしか輝く髪。

「八年前にね、ちょっとあったの。隣に住んでいた同い年の子でね、すごく仲良かったの。ちっちゃな頃から」

彼女の言葉が切れると、男は彼女を見て催促をする。

「……で？」

彼女の目が、ゆっくり大きくひらかれた。

「でも、お引越ししちゃったの。その時に約束してくれたの。…手紙のこと」

それから男はしばらく黙り、彼女もそれに習い口をとじていた。

幾台の車は通るも、バイクは一台も来ず、変わらない場面と音響。

「だからって毎日来て手紙待ってるなんて馬鹿みたいだ」

いつも唐突に投げ掛けられる言葉。知りたいから聞く。聞きたいから問う。否定したいことはそうする。

自分の――男の――真っ直ぐな意思。

「そんなことないよ」

男の右手が硬く握られた。だけどそれは、真っ直ぐ、正面遠くを見つめる彼女の目には入っていない。

「大切な人だから。待つのは当たり前だよ」

清々しく流れる、声と一瞬。繰り返されることなく、ただ一度の声明。

崩れだす足音は、もうそこ近く。

9話 くる日(後書き)

本当に…あの、遅くなりまして…(—△—；)

これからも遅くなったりあるかもしれないので、ブログにちびちび報告していきます(汗)

話数的にあと少しなので、見捨てずに付き合っていたただけると嬉しいです(^v^)

…できればお願いします(?)

お読みいただき、ありがとうございました。

(次回) 16日とか17、18とかに…(涙)

個人的に(?)この回は感想いただけると助かります(^.^；)

10話 あと3日

ずっと一緒にいた。
ずっと一緒にいたかった。

＊ ＊ ＊

その日は暑い午後の日で、近隣の家の植物にとまる蝉が、何不由なく声を荒げていた。

雲へ空へとのぼる熱気に、嫌になるくらいものを指し照らす日射と温気。

その空は青く、色風景だけ見てみると、さながら夏の日のプールのような冷たさがある。

くすぶる風を引き留める意味はなく、引き寄せるよりは通りすぎてほしい。そんな無茶な願いを口にすることなく、カンカンの日照りの下で、緑の中、元気に遊ぶ子供たちの姿があった。

家庭用の小さなスプリンクラーは、回転と共に辺りへしぶきを撒き散らしながら、それでもおとなしく芝生の中に溶け込むように埋まっている。

水滴のついた草花は、嬉しそうに各々姿を輝かせている。花だんに植えられたそれらは、まだ濃く茶色を残した土に支えられていた。「きゅー！」

緑の静かさは吹き飛び、すぐさま隣の一家自慢の風鈴の音を乞う。スプリンクラーの周りを飛び跳ねるようにして動きまわる、小さな二つの濃い影。日の高さと直射日光の成せる技だ。

「アカリちゃん、こっちだよ、こっち」

白い縁側近くに立つ男の子は、片手を口に近づけて掌を軽く曲げ、

筒をつくるような形を作っている。

頭を両手で抱えながら、大きく高い声をあげて走り回る灯。びしょびしょになった水色のワンピースは、青色へと色を変えさせられたようだ。

灯は目をぎゅっとつぶりながら、声のした方へと駆けだした。

十分かそこらぐらいスプリングラーが稼働していたため、芝生に根をはられた土でさえもぬかるみ始めている。

灯は男の子の既での所でぬかるみに足をとらてしまった。鈍い液体の音。前のめりに倒れ込む。

重く、地面が震動する。

端の芝生といっても、豊富にに水分を含んでいる地帯。そこに膝をついてしまったら。

短く細い両手を地面につけ、なんとか上半身と顔の泥だらけを免れた灯は、数度瞬きをした。その後、首筋をを内側に曲げて自らの膝元を見る。

白い肌、細く頼りない足。灯から見た見た曲線どまりの膝の皿は、見事に茶色で薄くコーティングされ、飛び散った細かい泥水が転々と素肌に付着している。

「う、ふえ……」

それを見た灯は、にじみだす涙も声も堪えられない。

「アカリちゃん、だいじょうぶだよ」

男の子の声で、灯は地面から目線を移した。男の子は右手を差し出す。

「ほら、立って」

男の子の手を握り、灯は介されるようにして立ち上がることができた。優しい声のお陰なのか、灯の涙は引っ込み、茶色の膝だけが残ってしまった。

自分の膝を再度目にすると、灯は両眉の外端を下げ、次第に目が潤いだした。

「ケガはない？ どこか痛くない？」

灯は涙を溜めながらも、首を横に振った。

左手を男の子に握られたまま、うなだれる灯。所々水に濡れて固まった髪の毛が、より長く重く垂れ下がり、形が現れる小さな頭。

男の子は左手でその頭にそっと触れて、ゆっくりと撫でた。

「だいじょうぶだよ、これくらい。お水とアワアワですぐいつものキレイにもどるよ」

いつの間にか灯は、顔を下に向けたまま、頭のとっぺんを男の子の胸辺りに軽く押しつけている。

それから二人ともその体勢で、少しの時間が流れていった。

でも、下を向く灯の目から、一度として涙がこぼれることはなかった。

排水溝に流れていく茶色混じりの濁ったお湯。

灯はプラスチックの椅子に腰かけ、壁に掛けたシャワーで膝にお湯を当て、タオルでゴシゴシと磨くように洗っている。

一旦シャワーをとめてからは、これでもかと言うほどボディソープが泡立ち、洗い場はたちまち白い異様さでいっぱいになった。

ふわふわと中を漂いだした小さな泡は、浮かんでは消え、浮かんでは消え。誕生と消失を繰り返す。全てがきつとそう。目に見えるからこそ、この泡の浮遊は他愛ないもの扱いなんだ。

かれこれ十五分。泡立ちすぎて、当の膝を見るのが困難となった。レバーを下ろすと勢いよくシャワーからお湯が降りだし、溜りにたまった泡が次々とつぶされていき、丸くつるつるした綺麗な膝が姿を見せた。

灯はそれを見るなりニツと笑い、自身の左右や後ろに残る白いふわふわの存在を忘れてしまったかのように、一心に見つめて膝を手で触っていた。

灯はお風呂から上がり、タオルに体を包んで、身をよじりながら水分を拭き取る。そんなやり方のため、体の所々に水滴が残るも、

タオル生地のワンピースパジャマが残らず吸いとってくれた。

新しいバスタオルのはしっこを掴んで床にすりながら、灯がリビングへとペタペタ歩いていくと、早めの夕食の匂いが広がっていた。そこまでの道のりにつく小さな水分の足形。

「アカリちゃん！」

ソファに座って灯の弟であるタツくんとは遊んでいた様子の男の子は灯に駆け寄り、灯の片手に握られているバスタオルを手にとると、それを灯の頭にかぶせた。

「ちゃんと乾かさなくちゃ。カゼひいちゃうよ」

髪の毛をぐしゃぐしゃと力強く、それでいて灯に痛みなど与えない男の子の手つき。

「灯ー、また慎吾くんに手をわずらわせて。ちゃんとありがとうを言うのよ」

湯気の上がるお皿をテーブルに並べながら、せわしなく動く灯の母親は、黄色のエプロンを着ている。胸についた大きなポケットには、可愛いクマさんの茶色いアップリケがついている。

揺れ動かされるタオルの間から見える灯の顔は、時折入りそうになる毛先を避けるように目をつぶるも、視線が慎吾から外れることはなかった。

その日の夜、慎吾は灯の家に泊まることになっていた。

会社から帰宅した灯の父親を交えて食卓を囲った。五人は灯の母親の手料理を味わい、どこにでも転がっているような会話を笑いながら楽しんだ。

そしてすぐに夜はふけ、灯と慎吾はいつものとうり子供部屋での就寝となった。

まだ幼いタツくんは両親の寝室で静かな寝息をたてているであろう時間帯。

子供部屋には普段灯が使っているベッドが一つしかなく、当たり

前のように二人並んで寝転がっている。

真っ暗だと寝られない灯は、每晚電気を消すのと同時に、微かな色光を映し出すプラネタリウムの小形映写機をつけるのだった。それは今夜も変わらない。

柔らかく指す細かい青い光で、天井や壁はさながら小さな宇宙のようになり、壁が壁でなくなる瞬間だ。

そんな中で、まだ起きていることを寝ている両親悟られないように、小声で話す灯と慎吾。

「ヒザ、もう痛くない？」

「うん。もう平気みたい」

ヒソヒソと交される会話は、窓から暑い夜の、うるさい雑音から体の温度を保つようだった。

「シンゴくんもかなしいね。お父さんとお母さんいそがしいから」
枕を両腕で抱きしめながら、平坦に頭を預ける灯の声は部屋全体になじんでいた。

「……うん。そうだね」

葉切れの悪い返事をした慎吾に、灯はなんの違和感も感じなかったのか、気にもとめずそのままサラサラと言葉を発している。

「今日のお母さんのハンバーグ、おいしかったね。はりついてるチーズってなんであんなにおいしいのかな」

壁に映しは出されても、空間に映しはしてくれない。確かに何かがそこにあるなんて、目が慣れても自信をもって言えないこと。

返事のない部屋。

灯は上を向いていた体を起こして、きつと隣にいるであろう慎吾の形を確かめようとしたのか、ゆっくり手をのばした。

「……アカリちゃん」

突然の存在してるよ発言に、中途半端にのぼされた灯の左手が大きな揺れを見せてとまった。

「ボクね、遠くに行くんだ」

まだ動きをとめている灯に、抱えられていた枕が静かに太股に座

らされている。

「遠くって……えんそく？　りょうこ？」

灯の本心であろう言葉は暗闇に澄んで消えた。

「引越すんだ。遠くへ」

闇の中は何の音もせず、誰かが動く気配もしなかった。

「外国に行くらしいんだ。飛行機に乗るんだって。だから今日もパパとママはいつもより忙がしくしてるんだ」

「……」

慎吾も起き上がり、灯の状態を確かめるように手探りで辺りの空気に触れていく。

「シンゴくんはどうしてそんな……平気なの。アカリといられなくなっても平気なの！？」

枕にぎゅっと抱きついて、灯は下を向いた。涙を溜めながら。

慎吾はと言うと、まだ手探りで灯を探していた。思いの外二人の間は長く、男の子とはいえまだ幼い慎吾の腕はそれほどの長さはない。

「もういい！　シンゴくんなんて知らない」

灯は勢いよく、ボフツと大きな音をたててベッドに倒れ込んだ。その音は慎吾にも聞こえたのだろう。

「アカリちゃん……」

寂しく響く、かすれた声。

「キライ！　シンゴくんなんて大っキライ」

枕を抱きしめる力が強まった。ポロポロと涙がシーツに落ちる度に、それに見合った音が灯の耳に入り、それでもすぐに染み消えた。余裕がなければ、何も見えない。聞こえない。そんな時もあるんだよ。

「……ごめんね」

灯に背を向けられて、近寄ることも出来ずにいる慎吾は、小聲で話すことを忘れてしまったのだろうか。

「ボクが小さくて何も出来ないから。……ボクがちゃんと、アカリ

ちゃんを守れるように、悲しませなくてすむように。大きくなったら、ボクはずっとアカリちゃんの側にいるよ」

灯の腕が緩んだ。

「手紙出すから。ボクの好きな水色の封筒で、手紙出すから」

灯の両親が起きる物音などせず、網戸越しから蟬の鳴き声と、近所の犬の遠吠えが聞こえたりする。静かな時間。

「それまで、ボクのこと待ってて」

静かに青い星を生んでいる、その動かない弱さが。強くない光をただそこに置くだけで、部屋の片隅にぽつんと居場所を作っている。

携帯のアラームが時間ちょうどに鳴り、彼女はすぐにそれをとめま。がぼっと起き上がった彼女は、寝起きだと言うのに目をしっかりとひらいて、瞬きをしながら段々と頭を後ろに倒していった。天井を見上げ、目線を下げ、また上に戻し。

口角が微かに上がり、短めの前髪を斜めに軽く促すと、暗い笑いを吐いた。髪の中に埋まる右手が動きをとめ、それに目の焦点が合った。

彼女はまた少し頭を後ろにもたせかけて、ほんの少し笑いながら手で髪の毛を整えた。

彼女がリビングに下りると、キッチンには黄色いエプロンをした母親が立っていて、まな板の上で心地良い音を立てている。

「お母さん……？」

刻んでいた大根をお鍋に入れる途中で、声に振り向いた。

「あ、灯。おはよう」

その笑顔は鍋に大根を入れる為に、少し固くなった。

「今日はね、なんだか自然と早く目が覚めてね」

ほら、座んなさい、と灯に席につくよう促し、炊飯機を開けてご飯を盛りだした。

「本当に感謝してるのよ」

彼女のお茶碗とお箸をテーブルに置き、今度はお玉でお鍋からお椀に何かを注いでいる。温かい湯気が上がるそれは、どうやらお味噌汁のようだ。

「平日はもちろん、休日だって。灯が朝ご飯作ってくれるから、お母さん保育士続けられてるんだよね。ありがとう」

はい、とお味噌汁を彼女の目の前に置いた。

「でも、ごめんね」

水で濡れた手をタオルで拭きながら、小さな気持ちをだした。

彼女は一瞬母親をまじまじと見つめ、次にテーブルにのった朝ご飯を見て笑顔を浮かべた。

きりりとした表情で、母親に視線を返す。

「身の周りのことくらい、ちゃんと自分で出来るようになってくちやいけないから」

母親の反応も待たずに下を向き、いただきます、と言って、ご飯とお味噌汁と味付けのりだけという質素な朝ご飯を食べ始めた。

10話 あと3日（後書き）

ブログでの時間には明らかに間に合いませんでしたが、なんとか17日に更新できてよかったです（^v^；）

気づかれた方もいるかもしれませんが（？）、サブタイトルの「あと3日」……………何かカウントダウンが始まったようです。

最後までお付き合いしてくださると嬉しいです。

では、お読みいただきありがとうございました（*´∀´）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1987b/>

赤いポスト

2010年10月8日14時02分発行